

2023年1月29日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書 14 章 22～26 節

説教題：取りなさい

私達がカナダで仕えた日本語教会は、イギリス国教会所属の教会の会堂をお借りしていました。日本語教会の礼拝は午後でしたので、私は時々、その教会の午前の礼拝に出席しました。その教会は、「90年前の礼拝」をそのまま守っている教会で、奉仕者は「修道士が着るような着物」を着て奉仕をしていました。しかし、私達の礼拝とその教会の礼拝で一番違う点は、その教会は、毎週「聖餐式」をすることでした。（「キリストの体の象徴としてのパン」を食べ、「キリストの血の象徴としての葡萄酒」を飲む、それを「聖餐」と言います）。その教会では、「聖餐」のプログラムになると、正面の祭壇に向かって出席者全員が2列に並びます。前から順番に、祭壇の所で、祭司から500円玉のような形をしたパン(ウェハース)を受け取ります。祭司は、1人1人に「これは、あなたのためのキリストの体です」と言って渡してくれます。それを受け取ると、次に奉仕者が葡萄酒の入っている大きな杯を差し出してくれます。杯に口をつけて葡萄酒を飲む人もいましたが、私は葡萄酒にウェハースを浸して食べていました。本物のワインなので、それだけでも顔がポツとするような感じだったのを覚えています。

そのように「聖餐」を毎週祝う教会もあります。メソジスト教会では、伝統的に「年に3～4回」行うところが多いのではないかと思います。なぜかというところ『「習慣として「聖餐」を守る』という守り方をしたくなかった』というのが、その理由のようです。「聖餐」を特別なものと考えて、受難週とか、イースターとか、クリスマスとか、そういう特別な時に「聖餐」を祝って来た、そういう伝統があるようです。しかし「聖餐」を大切にするという思いは、「頻繁に行う、行わない」に関係なく、どの教会も等しく持っているものです。

今日の箇所は、「聖餐が制定される」記事を記す箇所です。しかし「聖餐の制定」というのは、そのまま「新しい契約の制定」の意味がありました。「新約聖書」の「新約」というのは「新しい契約」という意味です。「聖餐」を通して「新しい契約(新約)」がイエス様と弟子達(彼らに続く全ての弟子達(信者達))との間に制定された。それが最初の「聖餐式の出来事」でした。この箇所を3つに分けて信仰の学びをします。

1：聖餐による新約の制定

前回、イエス様が「過越し」の食事の準備をされた箇所を学びました。イエス様ご自身が準備をされた「ある家の二階座敷」に、一行は入りました。そしてそこでイエスと弟子達は、「過越しの食事」を取るのです。「過越しの食事」は、「過越しの祭り」の時に食された食事です。「過越しの祭り」というのは、この時から1300年ほど前、「イスラエルが奴隷の地であったエジプトからモーセに率いられて脱出した」という、イスラエルの人々にとって「歴史上最大の出来事」を記念する祭りでした。「出エジプト」においては、「死の使い」がエジプト全土を巡りまわりました。しかしその時、神の言葉に従い、羊を屠り、その羊の血を家の門柱と鴨居に塗った家は、「死の使い」がその家を過ぎ越したのです。その夜、彼らは脱出の準備をして、屠った羊の肉を、種を入れないパンと苦菜と一緒に食べました。そしてエジプトを脱出して行ったのです。その出来事を覚えるのが「過越しの祭り」であり、その時に食されるのが「過越しの食事」でした。ですからその食事には、決められた食事の仕方があったのですが、それは省略します。

イエス様がここで弟子達と取られた食事は、「過ぎ越しの食事」だったと思われます。{ということは、イエス様は何教徒だったと思われるのでしょうか。「何を言っている。キリスト教徒に決まっているではないか」と言われそうですが、しかし、キリスト教が正式に誕生するのは、イエス様の十字架と復活、そして聖霊降臨の後です。ですから生前のイエス様はユダヤ教徒だった。だから「過越しの祭り」を祝い、「過越しの食事」を為さったのです。しかし大切なことは、本来「ユダヤ教の祭り」である「過越しの祭り」の「過越しの食事」が(それは「イスラエル人

が子羊の血によって救われ、神の民とされて行った」、そのことを確認し、記念する食事だった、その食事が—この時の食事によって、キリスト教にとってかけがえの無いものになった、ということです。それは、『子羊の血』ではない、やがて十字架において『イエス様の血』が流され、イエス様の『十字架の贖い』を信じる者は、『その血』によって永遠の滅びから救い出される、そして神の民とされて行く」、そういう「新しい契約(恵みの契約)」が制定された、その「新しい契約」を、イエス様ご自身が宣言して下さったということです。

いずれにしても、最初の「聖餐式」は、このようにしてイエス様と弟子達によって祝われました。そしてそこで「新しい契約」が制定されました。それは、イエスご自身が弟子達のために体を捧げ、肉を割き、血潮を流される、その十字架の出来事を目前にして—(そのご自身の犠牲を前提にして)—制定されたものでした。そして、それは今も変わりません。私達が「聖餐」に与る時、イエス様は私達にも語られるのです。「これは、あなた…のために与える、わたしのからだです…この杯は、あなた…のために流されるわたしの血による新しい契約です」(19~20)。

2：聖餐が制定された理由

概論のような話をしましたが、もう少し「聖餐」について踏み込んで考えて見たいと思います。なぜ、教会は「聖餐式」を祝い続けるのでしょうか。

「新約聖書」において「聖餐」についての最も古い記事は、使徒パウロの書いた「第一コリント書 11 章」の記事です。少し長いですが引用します。「私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。『これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行ないなさい』。夕食の後、杯をも同じようにして言われました。『この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行ないなさい』。ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです」(1 コリント 11:23~26)。ここでは、イエス様ご自身が「わたしを覚えて、これを行ないなさい」と言っておられます。パウロは、「『聖餐』を行うことによって、主の死を—(死の意味を)—証して行くことになる」と告げます。だから教会は、主の言葉に従って「聖餐」を守って来たのです。

しかし「ルカ福音書 22 章」を読むと、さらに切実な主の言葉があります。「イエスは言われた。『わたしは、苦しみを受ける前に、あなたがたといっしょに、この過越しの食事をするをどんなに望んでいたことか』」(ルカ 22:15)。ここに「イエスご自身が弟子達と『過越しの食事(聖餐)』をするを望まれた」、しかも「非常に強く望まれた」とあるのです。近年ある 2 つの教派が一緒に、「なぜ私達は聖餐を祝うのか」ということについて統一の見解を出したそうです。それは「主がこれをお定めになったからである。聖餐は誰が始めたものでもない、誰の願いによって制定されたものでもない。主ご自身が強く願って制定されたものである」というものでした。

しかし、なぜイエス様は、それほど弟子達と「『新しい契約の制定』の食事」をするを願われたのでしょうか。「過越しの食事」は、イスラエルの民がエジプトから脱出させられた、その記念の食事です。「自由・解放・脱出」の記念の食事なのです。イエス様が弟子達と、どうしても「過越しの食事」を共にしなければならぬと思われたのは、弟子達にも脱出が必要だったからです。そしてイエスは、「彼らがどこから脱出しなければならないか」、それをしっかり見ておられたのです。

この食卓には、イスカリオテのユダもいました。ユダは、この後すぐに、銀貨 30 枚を手に入れるために、あるいは、イエス様に失望して、腹を立てて、イエス様を売り渡すのです。裏切りは、他の弟子達も同じです。自分の身を守るためにイエス様を裏切って行く、皆が弱さを抱えていたのです。皆が、イザとなったら自己中心な卑怯な者だったのです。(いわば)皆が罪を抱えた存在だったのです。そのような弱い存在である彼らは、「律法を守ることによって保たれる古い

契約—(旧約)』では救われないのです。彼らには律法を守ることは出来ない、神の御心に添う生き方は出来ない、自分の良さでは、神の前に立てないのです。であれば「神との祝福された関係」に入っていくことは出来ないことになります。だからこそイエスは、彼らを愛するが故に、この弱い弟子達と「過越しの食事」を祝いたい、「新しい契約を制定したい」と願われたのです。「あなたの代わりに私が血を流し、私が肉を割き、あなたの罪の罰を私が一切引き受けて、それによってあなたが神との関係に入っていく、そのような契約を結びたいのだ、結ぼう」、イエスはそう言われたのです。彼らには、それがどうしても必要だから、それがなくてはならないから、イエスは「新しい契約を制定して上げたい」と願われたのです。

私達も同じではないでしょうか。私達は、一体どの部分で神の御心を満たして生きることが出来ているのでしょうか。森繁さんの歌に「スピード違反」という歌があります。その中にこんなエピソードが挿入されています。彼があるコンサートで会衆に「皆さんの中で一度もスピード違反したことのない人、手を挙げて！」と言いました。そうしたら40代の女性が手を挙げました。彼はビックリして、「奥さん、本当に1度もスピード違反したこと、ないんですか！」と聞いたら、その方が言いました。「1回も捕まったことはありません」。捕まらなくても、たぶんスピード違反はしているのです。でも、私達も似たようなものではないでしょうか。人のことは裁くのに、いざとなると自分も同じことをするのです。自分の都合が第一なのです。極端なことを言うと、イザとなったら何をするか分らない、ということではないでしょうか。罪人だと思わされます。(皆さんはいかがでしょうか)。また私などは、人を赦せなくて、愛せなくて、苦しむことも多いのです。私達も、律法を守ることで、神様に「お前は素晴らしい」と認められて、神様と繋がることは出来ないのです。「旧約」では救われない。イエス様の「新しい契約—(新約)」によって、ただ罪を赦され、神との関係に入れて頂くしかないのです。だからイエスは、私達にも言って下さるのです。「私は、あなたのために私の肉を献げ、私の血を献げ、あなたと新しい契約を結びたいのだ。私の恵みの契約によってあなたを守りたいのだ」。私達は、その申し出を感謝して受け取るのです。

でも私達は、時々忘れるのです。「自分の罪」を忘れる。「赦しの恵み、新しい契約の恵み」を忘れる。さらに心探られるのは、その「新しい契約の制定」のために、主イエスが経験された苦しみを忘れるのです。「百万人の福音」に、ある牧師のお証しが紹介されていました。その先生のお子さんが1歳7か月で天に召されて行くのですが、病院に行くと、そのお子さんは、父親である牧師を見て、涙を浮かべながら「にゅうにゅうこうだい(牛乳頂戴)」と何度も頼むのです。でも治療のために水分を与えることは出来ない。牧師夫妻は、たまらない思いで祈るのです。結局、お子さんは、両親に「バイバイ」と手を振って意識不明になり、やがて天に帰って行くのです。しかし、絶望している先生に十字架の幻が見えるのです。「息子の小さな両手首を見ると、そこは点滴針の跡で真っ青になっていた。十字架を見上げると、主の両手には釘が打ち込まれている。息子の小さな背中を見ると、ベッドに縛られ寝返りができなかつたために床ずれで真っ赤である。十字架を見上げると、主の背中は39度のむちで打たれた傷で肉が裂け鮮血がしたり、骨が覗いていた。息子の小さな胸を見ると、膿を吸い出すためのパイプが挿された深い傷跡があった。十字架を見上げると、胸には兵隊に突き刺された深い傷跡があった。息子の…『にゅうにゅうこうだい』のことばが聞こえてくる。十字架上の主のことば『我、渴く』が聞こえてくる。息子の体を抱きしめると、その目から涙がこぼれた」。最後にその先生は次のように結んでいます。「イエス様は、息子の苦しみを知っておられた。神は、子を失う父の苦しみを知っておられた。私は、自分の子どもを十字架にかけて全人類のために見殺しにする父の心の痛みを知った」。

私達は、「全人類」のため、というより「私」のために十字架にかかって下さったイエス様のその苦しみを、どこで、心から想起するのでしょうか。どこで、心から味わうのでしょうか。それが「聖餐」の場ではないのでしょうか。そして「イエス様の十字架の苦しみを味わう」ということが、自らの罪深さを知っている者にとって、「神の赦し」の尊さ、「神の愛」の深さを味わう、計り知

れない感謝と恵みの時になるのです。

私達も、時が来たら、「自分の罪—(神の御心のようにはどうしても生きることが出来ない現実)—を覚え、それでもイエス様の十字架の贖いの故に—(イエス様の苦しみの上に)—罪赦され、神の子とされた、天国に向かう者にされた、その恵みを覚える、その恵みを噛み締める、そのような時として」、「聖餐」を守って行きたいと思うのです。

3：聖餐の備え

私達は、まだ「聖餐」を祝う状況にありませんが、しかし今から出来る「聖餐」への備えがあります。「四福音書」の内、「ヨハネ福音書」には、「聖餐の制定」の記事がありません。その代わり「ヨハネ」は「イエスが『過越しの食事』の時に弟子達の足を洗われた」という「洗足」の記事を書いています。なぜ「聖餐の制定」の代わりに「洗足」があるのでしょうか。それは、「洗足」こそが、「聖餐」のもう1つの大切な意味を教えるからです。

宗教改革者メノー・シモンズは、「聖餐」について次のように教えました。「ちょうど、自然のパンが、沢山の穀粒を混ぜ、臼でひき、水でひとつにこね、それから暑い火で焼いて出来るように、キリストの教会もまったく同じ過程を通してつくられる。すなわち、多くの信者が、神の言葉という臼でその心を砕かれ、聖霊の水でバプテスマをうけ、純粹でけがれのない愛によって…(主の食卓につき)…1つとなるのである」。「聖餐」とは、主の周りに集められた者同士が—(心の中で)—手を握り合って受けるものなのだと思います。それこそ主が望まれることなのだと思います。

私達が次に「聖餐」を祝うのがいつになるのか、分かりません。しかし、「聖餐」の備えをすることは、今日からでも出来ます。イエス様は、弟子達の足を洗い終わった後、こう言われました。「主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。わたしがあなたがたにしたとおり、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです…あなたがたもこれらのことを知っているのなら、それを行うときに、あなたがたは祝福されるのです」(ヨハネ 13:14~17)。「お互いに仕え合う」、そのような心を育てることが「聖餐」に備えることとなります。お互いに「御言葉と聖霊様に心を砕いて頂くこと」を求めましょう。そして、「しもべの心」、「仕え合う心」を育てて頂くことを願い求めて行きましょう。そのようにして、祝福の「聖餐」に与るための備えを、今日から始めましょう。